

日本の神話伝説と中国雲南省納西族の 神話伝説の諸問題をめぐって

JAPANESE MYTHS AND THOSE OF
NAXIZU IN YÜNNAN

彭 飛*

In China there are no classical books of systematic mythology like *Kojiki*, *Nihonshoki*, *Fudoki* in Japan. Very often Chinese myths are taken into history and society. But in some minorities in China quite a few of the myths in their original styles are still seen, and they offer important materials for comparative studies of China and Japan.

Today I would like to try a comparison between those minorities' myths, mostly the Naxizu', and those of Japan. My themes will be (1) their common motifs in myths (2) myths seen in the pictograph of the Naxizu and Japanese mythology in *Kojiki*, *Nihonshoki*.

The pictograph of the Naxizu excited the scholars of letters and literature over the world not only because it is the most pictorial set of letters in the world, but because it has a few people still

*PENG Fei 大阪市立大学大学院博士課程。国際日本文化研究センター受託大学院生。復旦大学卒。元上海大学助手。著書に『大阪ことばと中国語』『日本人の言語慣習に関する研究』、論文に「日本の歌垣と中国の対歌」などがある。

using it, and because the documents written in the pictograph are greatly important in their contents - myths and songs.

We can see in the pictograph and its myths the ancient people's view of the world, their mythical thinking and imagination. Today I'd like to focus mainly on the egg and the germ of the reed in the "myths of oviparity," "floating bridge in heaven", "the moon and the frog," and "the divine marriage." Also I'd like to take up "*Amanoiwato-gomori* (the Hide in the Gate of the Celestial Rock Cave) and the cock" to look at folk events and legends of the magic power of the cock; the relation between カミ (the upper world) and 神 (God); the theme of heaven and earth, men and gods.

Finally I will speak about significance and problems of comparative studies on the myths of Japan and China.

はじめに

中国雲南省納西（ナシ）族は、世界で唯一、絵画的要素の濃い象形文字（筆者は「絵画文字」と呼んでいる）を現在も使用している。一部の絵画文字自体に神話伝説がまつわるのみならず、この文字によって記載されている東巴經典にも神話伝説があった。目下、地元の研究者を中心とするスタッフが、この經典を中国語に翻訳作業中であるが、經典の約五分の一がすでに翻訳公開されており、更に約四年間かけて、千二百種類の東巴經典を完訳する予定である。經典の中の神話伝説は、日本との共通なモチーフのものがあるか否かが、注目されている。

今回の発表では納西族の神話伝説と日本の神話伝説の諸問題の考究、といった大きなテーマを取りあげているが、時間の都合があるので、日本の神話伝説

と共通なモチーフの多くの例（筆者は二十六例ほど整理した）から、数例を抜粋して、主として納西族の現地での文献資料調査、儀礼調査の報告をさせていただく。

まず、幾つか断っておきたいのは、

- (1) 今回の発表で資料として取り上げた神話伝説は（イ）東巴經典の中の神話伝説（東巴教に属する、絵画文字によって記載されたもの）、（ロ）納西族の地域に残っている神話伝説（東巴教に属さないもの）もある。筆者は、（ロ）の中には最も古い形態の神話伝説と、それほど古くないものが混在していると思う。
- (2) 今回の発表の目的は、日本の神話伝説が納西族と同一なもの、あるいは納西族からきたものであることを論証するものではない。似ている所を探しだしてはいるが、それは世界の神話伝説の共通なモチーフを探るという視点に立つものである。比較によって、片方（日本か納西かの神話伝説）で詳しい記述が欠けている部分を深く理解できるようにしたいという目的である。また比較を通して、古代人の世界観、神話的思考法・想像力のありようを浮かび上がらせることをも目的とする。

第1 卵生神話

日本の「記紀」に似た体系的な神話に、納西族の『創世記』がある。これは「古事記」「人類遷徙記」「崇搬図」「崇邦統」「麼些族の洪水故事」などのタイトルで翻訳されている。

その神話の冒頭の部分は日本の『記紀』と同様に「混沌」型に属し、同じく「進化」型の神話とされている。

『日本書記』神代紀の冒頭に「古に天地未だわかれず、陰陽分かれぬときに混沌たること鶏子の如くして、ほのかにして牙を含めり」がある。

その他の伝説にも「卵生説」がみられるが、それほど多くはない。

納西族の神話伝説の起源説は「卵生法」が圧倒的である。『創世記』『東術

争戦記』『董術戦争』などの「卵生神話」を考察対象として整理してみよう。

(一) まず「卵」の形成について分類すると、主として次のようなものが挙げられる。

- (1) 気・音による卵の形成（氣息と声音の变化→卵の形→白い卵→白い鶏）
- (2) 神が卵を産む（氣息と声音の变化→神→黒い卵→黒い鶏）（善神→白い卵に変化→神の鶏→白い卵「九つ、天神・地神などの兄弟」）
- (3) 露から卵に変わる
上から→妙音 }
下から→瑞音 } →白風→白い雲→白い露→白い卵→神
- (4) 人類の卵は天から生まれ、人類の卵は地で孵化する。

人類之蛋由天下

人類之蛋由地抱

天蛋抱在大海里

大海孵出恨矢恨忍（人名）来

——『創世記』

- (5) 五行から卵が生まれる（気体の変化→白色露珠→五行→卵→天地→人）
- (二) 「卵から何が生まれるか」の角度から見ると、次のようなものを挙げる
ことができる。

(a)類：人類

(b)類：神様

(c)類：鬼

(d)類：動物（牛・馬・羊・鶏など）

(e)類：植物

(f)類：精威五類（木、火、水、土、鉄）

(g)類：自然、天体など（石、星、日、月、山、川など）

以上の起源類を更に分類すると、(1)人類、神鬼、動植物などの起源（始祖、君主、英雄なども含まれる）(2) 宇宙、国土の起源 (3)文化の起源がある。

次に関連する資料を見ることにする。

◇漢籍の資料：

未有天地之時、混沌狀如鷄子、溟滓始牙、濛鴻滋萌、歲在攝提、元氣肇始。『太平御覽』卷一引『三五歷記』

天地滓沌如鷄子、盤古生其中。『芸文類聚』卷一引『三五歷記』

◇朝鮮資料：

『三国遺事』『三国史記』に卵生神話の記載がある。中国の吉林省集安県にある「好太王碑」にも高句麗始祖朱蒙の卵生神話も記載されている^①。

朝鮮の卵生神話は「始祖類」に属し、「宇宙起源類」ではない。

インドとチベットの神話を調べたところ、「宇宙起源類」（宇宙卵）と生類卵（人間のみならず、あらゆる生き物）の神話伝説とが見られる^②。

日本と漢民族の神話には「宇宙起源類」がある。納西の神話には両方が数多くある。「宇宙起源類」は前にあげたが、始祖神話にはモソの『昴姑咪』がある。

「卵生神話」の起源については諸説があるが、他の論文で触れることにする。私は次の事を考えている。

(1) 宇宙卵の神話の源は朝鮮よりもインド、チベットの方向の可能性が最も高い。現存状況からみると、納西族の神話伝説のような豊富な「卵生神話」は中国でも世界でもとても珍しい。

(2) 『日本書紀』の「鷄子のごとく」は「淮南子」（えなんじ）、「三五歷記」（さんごれきき）からの借用である説には賛同するが、しかし、「淮南子」、「三五歷記」の「宇宙卵」は西南少数民族及びチベット（インドの可能性も）から取ったものと考えられる（最近、盤古神話はインドからの外來說が強い）。

(3) 「宇宙卵」は何を表すかについて、諸説があるが、簡単にまとめると、

- (イ) 卵から宇宙創造。
- (ロ) 混沌を卵に見立てる。

(ハ) 卵のような物の形成。

(ニ) 卵自体「天」と「大地」を意味するもの。

私はそれぞれに一理があると思う。諸説を総合してみると、混沌の中、天体の運動による卵のような物の形成、全体は宇宙のような形（宇宙の影）、蓋天である。私は各説に賛同し、それらをミックスした説を取る。

納西族は、「天は半圓形的、中間高、四周低」という考えを取っている。^③『迎浄水』では「圓天は上、方地は下」、真ん中は「頂天柱」という記述があり、その他『猷冥馬』などにも「天蓋地方」の記述がある。絵画文字の「天」の上部が尖っている。この尖った部分は「蓋天説」の「天中之極」の意になるであろう。

天祭りの場合、納西族の人々は祭壇の周辺に白楊樹を挿し、その木の頭の先に「十字」形に切り、その上に「卵」を入れる風習はいまでも残っている。

注

- ①『中国各民族宗教と神話大辞典』『中国各民族宗教と神話大辞典』編審委員会編 学苑出版社 一九九〇年
- ②陶陽など『中国創世神話』上海人民出版社 一九八九年 井本英一『王権の神話』法政大学出版社『中国各民族宗教と神話大辞典』
- ③李国文『東巴文化と納西哲学』雲南人民出版社 一九九一年

第2 太陽と鶏

「天の岩屋戸」の神話では隠れた太陽神アマテラスをおびき出すための一つの方法として鶏を用いている。

納西の神話伝説には次の話がある。天地開闢の後、太陽は九つ、月は十になった。太陽が多すぎて、地上の草が枯れてしまって、牛の食べる草も羊の飲む水も蛙の飲む水もなくなった。仕方なく、「潘」という神と「禪」という神（天地開闢の二神）にお願いした。二神は八つの太陽と九つの月を矢で射た。最後の一つの太陽と月は逃げた。隠れた太陽は人間には見えない。しかし鶏には見えた。鶏の鳴き声によって太陽が出てきた^①。

太陽神が隠れたのを雄鶏が鳴いて呼び返した、といった神話は中国の納西族以外の民族の地域にも広く語られている。苗族、ハニ族、サニ族、イ族、ブイ族、ブーラン族、ワ族、高山族、壮族、チンポ族などはそれである。

鶏が登場しない「射日」だけの神話は漢民族及びリリ族などの少数民族にある。

鶏自体に神の霊が宿り、鶏は魔よけの能力を持つものだと思う。儀礼の中の鶏（納西族）を見ると分かる。「鶏陪祭」があり、祭典の時、東巴は次のような句が大声で読まれている^②。

「我々は天神に雄鶏を生贄にすることを忘れなかった」

「我々は地神に雄鶏を生贄にすることを忘れなかった」

「我々は許神に雄鶏を生贄にすることを忘れなかった」

「夜明けを告げる雄鶏に伴ってもらわないと

人類は昼と夜を弁別できない

翠紅葆白が手の上に鶏を乗せて

下凡のとき、昼夜の区別しがたいことを心配しない」

「新しい一年がまた天地の間に降臨するに当たり

董神と塞神の新しい月に当たり

我々は最初から人類とお伴する雄鶏で

天神、地神と許神に祭献する」

葬式の場合、「陪伴鶏」という風習が残っており、棺のそばに鶏をつなぎ、男性なら雌の鶏、女性なら雄の鶏である。東巴はそばで「これは雄（雌）の鶏ではない、あなたの妻（ご主人）だ。一緒に喜んで祖先のところに行きましょう」と叫ぶ。

棺を担いで、火葬場に行く前に、東巴は「雄鶏が災いをふせいだおかげで、一駅一駅順調に人間の地に来た」^③と経を読む。

鶏は災難を避ける力を有することが納西族の儀礼で分かる。

日本との比較をしてみると、

(1) 「太陽を射る」神話伝説は日本にもあるが、天探女は七つの太陽を弓で六つまで射落としたという。しかし鶏は登場しなかった^④。

(2) 鶏の呪力の民俗行事と伝承は日本にもある^⑤。

(3) 日本では天の岩屋は魂の宿る場である。これは納西の神話伝説には見られない。『白黒の戦』という神話では、太陽を盗んで洞の中の柱に鎖をつける話はあるが、物忌み・鎮魂のためではない。

私の考えは次の通りである。

(1) 納西族のような「太陽と鶏」神話は自然神話に属する。「太陽を射る」神話は漢民族の神話（弓の名人の羿が太陽を射たという有名な話＝淮南子）がある。これについて漢の時代の石像及び長沙での発掘された帛画でこれを裏付けることもできる。しかし、鶏は登場しない。鶏の鳴き声によって「太陽が出てきた」神話はない。けれども、中国西南少数民族の地域に多く見られる。

(2) 日本の鶏の鳴き声によって太陽が連れ戻される神話（天の岩屋戸）は自然神話から加工され、歴史化されたと考えている。

(3) 神話としての鶏は呪的なもの、といった点は日本と納西の神話伝説とに共通しているが、しかし納西の神話は日蝕神話と関連しないようである。

注

- ①この神話は麗江にある社会科学院東巴研究所の東巴及び納西人王世英氏から採集したもの。
- ②『納西族東巴文学集成』阿幹など 中国民間文芸出版社 一九八八年
- ③『民族と宗教調査』社会科学院東巴研究所
- ④『日本民俗語大辞典』石上堅 桜楓社
- ⑤たとえば、沖縄、静岡などはそれである（東南アジアの古代文化66号 P69を参照／『日本民俗語大辞典』P82を参照）。
- ⑥『雲南少数民族神話選』李子賢 雲南人民出版社 一九九〇年

第3 葦牙の如く

『古事記』『日本書紀』には「葦牙」の話がある。この「葦牙の如く」に関し

て今日までに提出された主な諸説を眺めてみると、

(1) 「宇宙樹」説：

原始の混沌の真ん中に、最初の形として現れたこの葦の芽はいわゆる宇宙樹のような、シンボリックな樹木として考えられる（松村武雄、山本節など）。

(2) 「春季節」説：

芽は芽と同意。春の季節感が見られる。生成力を春先の葦芽に直観した神格（萩原浅男など）。

(3) 「地から天への道交」説：

国の高天原への感応として物の萌え騰りは、地における地から天への道交である（森重敏など）。

(4) 「生成を暗示する」説：

最初の混沌状態から天地万物は葦の芽でも生えるような具合に、生成する（山下太郎など）。

など、様々な見地からの研究がなされた。

「葦芽」は漢籍の「混沌」神話にはない。

納西族の『東術争戦記』には、天地が分かれて→気によって卵が誕生→神→露→海→海から神樹が生まれる、といったモチーフがある。

そこで、次に納西族神話の「神樹」と関連して納西族の「木への信仰」について考察しておくことにする。

(一) 納西族の絵画文字を見ると、東巴文字の「子孫」を示す文字は「卵から樹の枝が出てくる」というものである。

「子孫」



「男女の性交」「変化」の意味を示す文字は「木と蛙」で表現される。



「祖先」と「死者」を示す文字にも木がつきものである。

(祖先－「猿音」)



(死者－「蛇音」)



「～由来」を示す文字には「樹」がつきものである（音符のみならず、意味をも兼ねている）。例えば：「舞蹈の由来」「丁巴什羅の由来」はそれである。

(舞蹈の由来)



(丁巴什羅の由来)



(二) 次に、「木」に関連する儀礼と結び付けて考えてみよう。

祖先を祭る時、「柏」、「松」、「栗」の三種類の木の枝を祭壇に挿す。柏の木の後ろに、もう一本「白楊樹」を挿し、その木の頭の先を「十字」形に切り、その上に卵を入れて「天柱」とする。

その木を神主→祖先と見なしている。左側に挿した木は「天神」を象徴し、右に挿した木は「地神」、中央に挿した木（柏）は「天舅」許神（天地の中央）を象徴する。これは納西族の「古歌」によく見られる。

納西族では「木」「和」という姓を取る人が一番多い。

そこで、筆者は次のように考えている。

(1) 納西族の「神木」への信仰、木で祖先を祭るのは人類起源と関連するものである。

(2) 日本の「葦の芽」は最初の生命力を示す、つまり生命力を葦芽に見立てることは納西（生命力を木に見立てる）と共通している（甲骨文の「生まれる」という字も「種→芽の様子」を示す字である）。

第4 「天浮橋」「天橋」と「天梯」

神婚について少し触れてみたいが、納西の『創世記』にも洪水後、生き残った一人は天に上がって、天女に求婚する「羽衣型→難題解答→結婚」の共通したモチーフがある。これについては伊藤清司^①、君島久子^②の著書、論文

で取りあげられた。

私の考えでは納西の『創世記』はおそらく麗江地域（父系社会を中心とする）の神話である。永寧（母系社会を中心とする）地域のモソ族はこれと逆に「天上の男神が地上の美女と結婚する」、といったものである。有名な神話『格姆女神』はそれである。

「天の御柱」についても少し触れておきたいが、それは納西族と同様に宇宙軸的な存在ではないだろうかと思う。

納西の神話では「天を支えるもの」と見なす。これがないと天地が揺れる。

『董述戦争』では日、月、星、辰はいずれも「居那若羅神山」（天を支える柱）をめぐる旋回するという。真ん中のみならず、東西南北それぞれ一本ずつ柱がある。これは天に通じる道でもある。

次に人界と天界の「交通路」について考えてみる。

日本の『記紀』には「天浮橋」がある。これは「天空に浮きかかる橋」、「片一方が水上、空中に差し出した栈橋式のもの」「地から天にむかってそびえたつ岩の梯」、「豎梯」など様々な解釈が見られる。

『丹後の国風土記』『播磨の国風土記』にも天上までの梯についての記載がある。『万葉集』には

天橋も 長くもがも 高山も 高山もがも 月読の 持てる変若水 い取り来て 君に奉りて 変若しめむはも

—— 卷十三、三二四五

納西の神話伝説には「天梯」というのがある。『昂姑咪』では天梯を通して天宮に入って火と食べ物を探しに行ったという。

「天梯」の他には、次のようなものがある（「天梯」の類と見なしてもよい）。

「竹の子を通して天降」型

「神山を通して天降」型（日本にもある。天降り山）

「神樹を通して天降」型（日本にもある。高木神）

「柱を通して天降」型（日本にもある。）

「祭壇を通して天降」型

天と地はつながっている。通路があるため、歩いて降りられる。例えば、丁巴什羅が十八層の天から降りるコースは、次のようである。

天界→太陽界→月界→星宿界→雲界→虹界→鬼界→山の頂き→山の真ん中→山の麓

日本と納西の例で分かるように、この世とあの世、天と地には通路があって、つながっている。天浮橋や天梯のような「通路」があることは共通している。筆者はこれを「天地通路モチーフ」と呼んでいる。

注

①伊藤清次『日本神話と中国神話』学生社

②君島久子『天女の末裔』『民間説話の研究』所収 同明舎

第5 死体化生

私は「化生形」の神話を、「死体化生形」と「部分器官化生形」の二つに分類する。左目を洗うと、アマテラス大御神（日神）、右の目を洗うと、ツクヨミノミコト（月神）、といった話があるが、これは漢籍（左目→太陽、右目→月）によるものだと見られ、「部分器官化生形」に属し、中国の漢民族、及び他の民族にはよく見られる^①。

『古事記』のオオゲツヒメ殺し、『日本書紀』のウケモチノカミ殺しによる穀物などの誕生の話がある。これは「死体化生形」に属する。

納西族の神話伝説には「死体から穀物ができる」という話はない。しかし、昔の風習に農業の豊作を祈る「いけにえ」がある。人や獣を殺して畑に埋め、農作物の豊作を祈る儀礼である。日本にも「田植え」と「女性の死」の伝説がある^②。勿論、納西族のみならず、雲南の他の民族にも見られた。雲南博物館に展示された青銅器の中に「いけにえ」の場面のものがある。

納西の神話伝説の「化生形」は次の通りである。

(1) 蛙が死ぬ直前に、五回叫んだ。そののち、その死体から、木、火、土、

鉄、水の「五行」が出現した。『白蝙蝠取経記』

- (2) 虎の死体から天、地、日、月、木、石、山、水への変化。『虎の由来』
- (3) 牦牛の死体の血、肺、肝などは太陽、月、山、水、木、石及び万物への変化。『創世記』
- (4) 鹿の骨→石、鹿の血→水、鹿の肉→土。『東恩古模』
- (5) 「死んで樹に化する」という伝説がある。

以上の例で分かるように動物から何かが誕生する例が多い。穀物の誕生はないが、イザナミの母体から土、金属、水などの神が誕生の例がある。同じく「死体化生形」に属し、筆者は「死体再生モチーフ」と呼ぶ。

穀物は天から持ち降りた伝説は日本と納西には両方ある。

日本にはホホデミの祖父ホノニギは高天原から稲を携え、高千穂—高い千々の稲穂の上に天降（あも）りした稲穂の神、穀霊であった^③。

納西の《祭天》には、次の例がある^④。

～是勤劳智慧之母鲁古谷咪、从天上带下来五谷的种子、人間才有了智慧的財富。

注

①少し例を挙げると、

◇漢民族の盤古化生。

【繹史】卷一引【五引歷年紀】：

首生盤古、垂死化身、氣成風雲、声成雷霆、左眼為日、右眼為月、四肢五体為四極五岳、血液為江河、筋脈為地里（理）、肌肉為田土、髮髭為星辰、皮毛為草木、齒骨為金石、精髓為珠玉、汗流為雨沢、身之諸虫、因風所感、化為黎明。

【述異記】（卷上）：

昔盤古氏之死、頭為四岳、目為日月、脂膏為江河、毛發為草木。秦漢間傳說：盤古氏頭為東岳、腹為中岳。左臂為南岳、右臂為北岳、足為西岳。先儒說：盤古氏泣為江河、氣為風、声為雷、目瞳為電。

◇イ族の【梅葛】：

虎が死んで、左眼→太陽、右眼→月亮、虎牙→星星 ～ 虎皮→地皮、硬い毛→樹林、柔かい毛→草。

◇ハニ族の【奥色密色】：

目→日月、齒→星。

◇布朗族の【顧米亞】：

牛の両眼→星辰、血→水

◇ヤオ族の『伏羲兄妹歌』：

大崙原是盤古骨、小崙原是盤古身、両眼変化成日月、牙齒分成作金銀。毛髮變化為草木、尚有鳥獸出山林、氣化成風汗成雨、血成江河万年春。

◇白族の打歌『創世記』：

盤古、盤生から化身された木十偉神巨人、左眼→太陽、右眼→月亮

◇チベット族の『万物起源』：

(神巨人十巴が牛を殺した)牛の頭、眼、腸、毛、蹄、心臓→日、月、星、江河、湖川、山岳、森林への変化。

②山本節『神話の森』 P159、P503 大修館書店 一九八九年

③山本節 前掲書

④陳烈『雲南モソ族人民間文学集成』中国民間文芸出版社 一九九〇年

おわりに

日本の『古事記』『日本書紀』『風土記』のような、体系的な神話伝説を記した古典は中国の漢民族にはほとんどない。原始的な神話を歴史化、宗教化、人格化、社会化することは中国の神話伝説に顕著に見られる傾向である。しかし、中国の少数民族の住む地域では原始的な神話伝説がかなり残っているので、日中神話の比較研究には貴重な資料となろう。

納西族の神話伝説に比較すると、日本の方がはるかに具体化、歴史化されているようである。納西族の神話伝説は、『記紀』のような王権神話がなく、より原始的、素朴的である。

最後に強調したいのは日本文化とインド・チベット文化との関係を更に研究すべきことである。納西族の居住地はインド、チベット、また白族などの他の少数民族、及び漢族に囲まれている地域である。納西族は他の地域への文化伝播と他の地域の文化を吸収し、そのまま残したのがある。

最近、西南シルクロードの研究が盛んになってきた。この「蜀身毒道」とも呼ばれる道は西漢から始まり、シルクロードよりも歴史が長い。四川省から二コースで雲南に入り、それから大理、永平、徳宏からミャンマー、インド、ヨーロッパへと東南アジアとの文化・貿易交流の主要な道であった。納西族の地域もこの「古代の道」の一部分を担っていた。

以上、納西族の地理的位置の重要性を強調した。東巴經典のほとんどはまだ翻訳中なので、完訳されれば、より多くの比較研究の対象が発見されるだろう。今後、私は本格的な比較研究に取り組もうと思っている。

討議要旨

座長よりナシ族の固有の宗教に関する質問があり、発表者は「ナシ族固有の宗教はトンパ（東巴）教という原始宗教でインド、チベットの原始宗教、特にチベットのボン教の影響をかなり受けている。象形文字はトンパ教の教えを記載する宗教文字であるが、この文字の研究は大変遅れている。この文字の起源に関して、その通説となっているのは千二百年という説だが、もっと新しい、もっと古いという説もある。トンパ教典のもっとも古い写本は、今日迄は伝えられなかった。これが研究上の大きな問題となっている。また、ナシ族は火葬のため、埋葬品として古い物が残っていない。文字は千三百ある。」と答えられた。